

---

# Blue\_Destiny

壇 敬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Blue – Destination

### 【Zコード】

Z5643G

### 【作者名】

壇 敬

### 【あらすじ】

異なった惑星の、そこに生きる生物たちの、運命の擦れ違いを、立場を変えて書いてみました。

## 奇跡の星

その星を、我々は「奇跡の星」と呼んだ。

オレンジに輝く恒星を見つけた時は、『よく普通のルーティンワークに過ぎなかつた。そして、惑星を持つことが分かつた時は、仕事の量が増えるという印象でしかなかつた。

だが、この星系がハビタブル・ゾーン、すなわち生命生存可能領域を持つていて、その領域に惑星が存在することが分かるに至つて、我々の仕事は膨大になつたが、同時に我々の興奮がその辛さを打ち消した。

人類は恐ろしい発展をしていた。それは悪魔と形容しても良い程のものだつた。

超空間航法の発明により宇宙への進出を容易にした。太陽系内はずい分前から人類の庭と化していた。その機動力を存分に使って、太陽からは無尽蔵のエネルギーを取り出し、地球には月までの軌道エレベータを設置し、火星をプラネット・フォーミングし、金星を浄化・減圧化して居住可能にした。更に、カイパー・ベルトから資源を取り出し、資源採掘の為に木星と土星のサイズを1／3にしてしまつた。

それでも、人類の欲望は抑えられなかつた。423億の人口を数える人類を支えるには、太陽系は、あまりにも小さくなつてしまつた。そこで我々は、資源と居住を求めて星域探査の任務を帯び、6年前に地球を出発したのだった。

我々は、その星への接近を開始した。近づくにつれて、その星の実体が明らかになつてきた。

この星を見た時、誰もが信じなかつた。信じられなかつたのだ。

その星は、大陸には青々と茂った植物に包まれ、海にはどこまでも透明な水を湛えていた。そして、白い雲が美しく流れていった。

美しい、青い星。

かつて、地球もそう形容されていたと、古典で学んだことを思い出出した。

地球は、完全に人工管理されていた。

地質は完全に改良され、海は均一の深度になり、地殻内部の、マントルさえもその密度、温度、流体性質までが制御されてしまっていた。大気はコンティショナーで制御され、天気は予測でなく予定となっているのだ。

だが、この星は全てが「天然」なのだ。生まれたままの姿、自然の姿、それは我々も初めて目にしたものだつた。観ているだけで自然の恐怖を感じて、手が震えてくるのだ。

我々は、この惑星を「ブルー」と名付けた。

「ブルー」の周回軌道に宇宙船を載せて探査するついでに、かすかな電波を観測した。

その電波の解析を始めたのだが、非常に高度な暗号化が施されていて、我々の船の能力では容量が不足したので、超空間通信でデータを地球に送った。地球から送り返された解析結果は驚くべきものだつた。

「私達は貴方達の来訪を予期していました」

「それは、1億6千年前からのことです」

「ただし、コンタクトは一度だけ」

「その後は、速やかな退去を望みます」

それはコンタクトを示唆する内容だった。そして、ランデブーする地点の、惑星の座標を示していた。

しかし、そのメッセージの内容は実に微妙なニュアンスだった。我々はその真意を図りかねていた。

だが、地球からの業務指令は「接触せよ」とのことだった。

我々は、指令に従う他はない。

上陸舟艇の準備を開始し、コントラクトチームが選任された。

コントラクトチームに選ばれた乗組員は、まるで天下を取つたような振る舞いをした。

それもそのはずだ。我々は一度も惑星に降りたことが無いのだ。

そう、我々は勿論、地球生まれではない。

選ばれた人々しか、地球では住めない。それは「神」と呼ばれる人々のことだ。

火星や金星、月やタイタン、ガニメデのような、星の上で生まれる人々でもスーパー・エリート達だ。

我々のような軍人階級でさえ「ロニー」生まれだ。ワーカーはステーションや小惑星生まれが普通だ。だから、星に降りること自体が凄いことなのだ。

初めての惑星の大気圏飛行は快適だった。明るい色で彩られた眩しい世界に感じられた。

指定された座標に、上陸舟艇は静かに着陸した。

そこは、風がそよぐ草原だった。隊員全員がしばらく、その風景に見惚れた。

ピンクや赤、黄色の花が咲き乱れ、美しい緑の絨毯がどこまでも続いていた。

遠くの山は青く霞み、海と空の境目が分からなかつた。

その星に降り立つた時、我々は不恰好だった。

スペーススースがいかに不似合いかを思い知らされる程、美しい星だった。

Wikiで見たものが、今現実に目の前にある。我々は知識でしか知らないことばかりだ。

だから、それを信じることが出来なかつた。

だから、スペーススースを脱ぐことは出来なかつた。

それが我々の常識だつた。

しばらくすると、木立の影から人影が現れた。白い布をまとつた数人の人間が、我々の前まで来て立ち止まつた。外部マイクに切り替えると、白い布をまとつた人々の声が流れてきた。

「ようこそ」

白い布をまとつた人々が話すその言葉は、聞きなれたものだつた。太陽系内でもなかなか聞かれない程、実に美しい発音の太陽系標準語だつた。

「だが、不幸な出会いでした。予測されていたこととはいえ……」  
白い布をまとつた彼らは、どこか悲しげな表情が見えた。だが、すぐにその表情は消えた。

「遠慮いただきたい」

我々は訝然としなかつた。どうして、彼らは我々を拒否するのか。「どうしたことなんですか？」我々はまだ、この星には何もしていないのに」

彼らは、また悲しげな表情をした。

「私達は、それが受け入れられないのです」

そう言つと、彼らは背を向けて立ち去り始めた。  
我々は慌てて呼び止めた。

「どうしてなんですか？ 理由を、その訳を教えてください！」

彼らは振り返つて、静かに言つた。

「胸に手を当ててみてください」

彼らは、首を傾げて微妙な微笑をした。

「でも、それでは分からないかもしない」

「それから、履き捨てるように言つた。」

「間もなく嵐が来ます。その前に飛び立たれるがよい。さもないと命を落とします」

そして彼らは、去つて行つた。

我々は納得できなかつた。せめてもと上陸舟艇の周りを探索した。しばらくすると、辺りが急に暗くなつてきた。そして、スペーススーツのフェイスプレートに水滴が付いた。

「ん？ 何だ、これは？」

見る見るうちに、液体が空から落ちてきた。そして、異常電圧を感知したスペーススーツが警告を発していた。

次の瞬間、爆音と共に、空から白い輝く閃光が上陸舟艇とコンタクトチームを襲つた。

上陸舟艇は雷の異常電圧で静電破壊されて爆発炎上し、コントロールの各隊員はスペーススーツへの直接の落雷で感電死した。我々は不幸だつた。天氣を知らなかつたのだ。

この事態に慌てた軌道上の探査船は、地球への超空間通信をしようとした矢先に、惑星「ブルー」からのスプライトで、動力を破壊され航行不能の事態に陥つた。

更に、スプライトの影響で惑星軌道周回速度が鈍化、惑星ブルーに落下する羽目になり、36時間後に大気圏で燃え尽きた。

その後、地球は2度ほど、この惑星「ブルー」に捜索を兼ねた探査船を派遣したが、いずれも音信不通の遭難という結果だつた。

地球は、惑星「ブルー」を封印した。

惑星「ブルー」は幻の星になつた。

奇跡の星・惑星「ブルー」

自然の心を持つ貴方なら、行き着くことが出来るかも… 知れませ  
ん。

## 奇跡の星（後書き）

久しぶりの投稿です。  
感想をいただければ幸いです。

我々は管理されているのかもしない。  
「運命」というシロモノに。

我々の惑星は美しい。

大地は緑の木々が生茂り、海は深い藍色を湛え、空は高く青々と澄み渡っていた。

大いなる大気の循環が、海を蒸発させ、雲を作り、雨を降らせる。大いなる水の循環が機能し、降った雨は大地を削り、川は流れ、海流は流れ、季節を作り出していた。

植物は大地のほとんどに繁茂し、動物もまた、大地のほとんどを闊歩した。

ありふれた生態系の中で、我々は生活している。

我々は狩猟をし、木の実を集めて暮らす。

それ以外には認められていない。

だが、決して飢えることは無かつた。

それで十分だった。

我々は『文明』という果実を、口にする必要がなかつたのだ。だからなのだ。

「運命」が我々に目を付けたのは。

我々は文字を持たないが、言葉は獲得した。  
それも「運命」が仕向けたのかもしない。

いつしか、我々は「声」を聞くようになった。

我々の祖先は代々、その「声」の言葉を何百世代と語り継いで來

たのだ。

それはこのことの為だった。

我々は「運命」から仕事を託つたのだ。

それはいつもである。

「我々は只の一度だけ『訪問者』と接触する」

只、それだけなのだ。

それが、与えられた唯一の仕事だった。

語り継いで来た事柄の通りに、宇宙から「訪問者」がやってくる。星のような輝きのモノが、我々の惑星を巡るようになる。

それが「訪問者」の乗り物なのだ。

その乗り物に、我々は念じるのだ。

「私達は貴方達の来訪を予期していました」

「それは、1億6千年前からのことです」

「ただし、コンタクトは一度だけ」

「その後は、速やかな退去を望みます」

じばりぐすると「訪問者」の乗り物から銀色のモノが舞い降りてくる。

銀色のモノが地上に降りると、その銀色の中から、ヒトの形をした、

だがヒトとも思えないモノが出てくる。

それに我々は、いつも語りかかるのだ。

「ようこそ」

「だが、不幸な出会いでした」

「予測されていたこととはいえ…」

「私達は、貴方達を受け入れることはできない」

「これ以上の接触は」遠慮いただきたい

そして、我々は彼らから去つていいくのだ。

彼らは、我々に質問を浴びせかけるが、答えも既に語り継がれている。

「私達は、それが受け入れられないのです

「胸に手を当ててみてください」

「でも、それでは分からぬかも知れない」

そして、最後に必ずこう言い残すのだ。

「間もなく嵐が来ます」

「その前に飛び立たれるがよい」

「さもないと命を落とします」

だが、彼らは我々の言葉に従つことはほとんど無かつた。  
彼らは、大いなるイカズチによつて、必ず命を落としてしまうの

だった。

こうして何千、何万と繰り返し来た仕事。

空しさを覚える時もあるのだが、我々はいつまでも覚えてはいなかつた。

というのも、世代交代が早いのだ。

1世代で1回の仕事を経験する程度なのだ。

語り継がれた仕事をするが我々の使命。

まだまだ、語り部の話は終わらない。

安住の地である我々の惑星を、我々は「青」と呼んでいる。

我々の惑星「青」がこつまでも、いのままであつ続けるやうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5643g/>

---

Blue\_Destiny

2010年10月8日14時44分発行